

銅賞

少しずつ世界を広げよう

横須賀市立田浦中学校三年

中野沙紀

私の父は高校生のときに手話の勉強を始め、そして今は陸上自衛官として勤務しながら、地元のサークルに入り、少しずつであるが手話の勉強を続けている。父は、健康者であり、身近に聴覚障害者もない。ではなぜ手話を学んでみようと思ったのか、そしてなぜ勉強を続けているのかについてある日父に尋ねてみた。父は奈良県の田舎町に生まれ育ちました。小学校を卒業後は、中高一貫の学校に通ったことから近所の友人と遊ぶ機会はやや減ったそうだ。そんな中、近所の人たちとの触れあいを求めて、たまたま町内の掲示板で見かけた手話サークルに入ってみたらしい。サークルには自分の母親かそれ以上のおばさん達が大部分で、男性はごくわずかで、ましてや学生は一人もおらず、かなり恥ずかしかったらしい。しかし、すぐに親切的なサークルの皆さんのおかげで楽しく通えるようになったのです。それまでは、手話はニュースなどで画面の片隅に出ているのを見たことしかなかった父でしたが、手話はそもそも我々が使っているような身振りや手振りから発達したことや、実は手話にも

方言があることなど知ってから手話に対する興味も少しずつわいてきたそうです。そして、サークル内の聴覚障害者の方々とコミュニケーションを取れるようになってきてからは、聴覚障害者の方々の考えていることや気持ち、そして環境を知り、手話をもっと勉強したいと思うようになったことでした。特に私が父の話で印象に残った事は、「私たちは世の中の情報を、見たり聞いたりして手に入れることが出来るよね。例えば、電車が何か事故があって止まってしまっても電車内の放送で知ることが出来る。でも、聴覚障害者の方々は、そういった情報を入手出来ない分、ちよつと世界が狭くなっているのかもしれない。でも、お父さんや他の人たちが手話が使えらるようになったら、ほんの少しだけでも、聴覚障害者の方々にとっての世界がその分広がるような気がするんだ。」との言葉でした。私たちが普段、あたり前と思っている世界の広さは、障害を持った方々の広さとは少し違うのかもしれない。例えば目が見えない方にとっては私たちの絵や映像といった世界が少し狭く感じるのかもしれない。でも、その狭さは私たちのほんの少しの努力で広がることができそうな気がします。バリアフリーという言葉がありません。辞書を引くと「日常生活や社会生活における物理的、心理的な

障害や、情報に関わる障壁などを取り除いていくことをいう。」とあります。これまで私がイメージしていたのは、敷居の低い家や、階段の手すり、車椅子用のスロープなどでした。でも、父の話聞いてからは、私たちの心や技能によって障害者の方々の世界を広げることにもバリアフリーなのだと感じるようになりました。次になぜ、自衛官という仕事を続けながら、手話の勉強も続けているのかを聞いてみました。父は「大きな災害が起きた時、お父さん達は災害派遣として被災地に行く。そこは電気や水道はもちろん、道路や家もすべて破壊された、とても大変な場所なんだよ。被災をされた人々はどこに逃げたらいいのか、あるいはどこに行ったら食事をもらえるのかなど、知りたいことがたくさんある。でも、それらの情報の多くは放送などの音声によるものが多いんだよ。きつと聴覚障害の方々はとても不安に感じていると思う。でも、もしその時に援助に駆けつけた自衛官がほんの少しでも手話が出来たら、その聴覚障害者の方にとっては、とても安心できると思うんだよ。きつと、家族の安否を尋ねたり、自分が必要な事を伝えることが出来るということは、その方にとって生きる力の元になるのではと思う。実は父さんには小さな夢があって、出来れば自衛隊の中で手話サークルなど

を作って、少しでも手話が出来る部員さんを増やせたらいいなあって思っている。そのためにも、まず自分が勉強しないとね。」私は怒ると怖い、ダイエットしなきゃといいながらいつも夜食を食べているという父の印象が少し変わりました。誰かのために勉強する姿を少しだけ尊敬できるような気がします。私は今受験生です。しばらくは自分自身のための勉強を続けていかなければならなそうです。でも、高校生になって少し余裕が出来てきたら、父のように誰かのための勉強というものを初めてみたいと思います。そのことはきっと誰かにとっての世界が少し広がることにつながると思います。